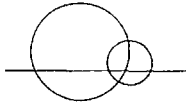


〈諸事項の報告・紹介〉



近衛篤磨書の寄贈について

愛知大学東亜同文書院大学記念センター
客員研究員

越知 専

筆者の友人に名古屋市で著名な陶芸家がいる。中区のノリタケギャラリーやノリタケの森で個展を開く古橋尚氏である。

愛知大学名誉教授の憲法学者、酒井吉栄博士が8年間に亘って、豊橋から名古屋へ通いつづけ、二百余の茶わんを造るために指導を受けたという外山窯の主人である。

彼は、銘石や古い掛軸、人物像などを研究し、再評価や再発掘することが得意なようである。

平成16年に、ドイツと日本の文化のかけ橋として、佐野えんねさんの再評価をし、名古屋の朝日文化センターや、愛知大学豊橋のキャンパスでパネル展や講演会を開いている。

佐野えんねさんは、愛知大学と縁が深い。愛知大学創成期のドイツ語の講師として、岐阜・井深の里から自転車や電車を乗り継いで2時間半、羽織袴姿で来校、愛知大学にドイツ語やドイツ文化、茶道花などの日本文化を教えていた。その御主人佐野一彦さん（神戸商大教授、愛知県立芸大教授）の実父佐野善作さん（東京商科大学初代学長）は、愛知大学名誉学長本間喜一氏と親友であることを、古橋氏は知っている。

また古橋氏は、愛知大学の前身、東亜同文書院の創設者近衛篤磨に関心を持ち、その書をインターネットで見つけだした。

そうして、愛知大学東亜同文書院大学記念センターに勤務している筆者に、喜寿の祝として呉れるというのである。タテ235cm ヨコ70cmの立派な掛軸である。

記念センターには、近衛篤磨の直筆の書はまだ収蔵展示されていない。その漢詩の内容が、名古屋ささしま新キャンパス開校に相応しいということから、古橋氏の諒解を得て、記念センターへ寄贈することに決まった。

その書の内容は次のとおりである（解説・武井義和ポストドクター）

「川や湖を渡れば、大波が湧きあがることを知る。山に登れば、足元の道の危いことを知る」と言うものであり、「為山本達雄」と記したる如く、近衛篤磨が、日本銀行総裁の山本達雄に贈った書で足もとをしっかりとみつめ心を引きしめて国家の運営に当る気概を持つように願った漢詩である。



漢詩掛軸を中心に
左 藤田佳久センター長 右 古橋 尚氏